

『資本論』の沙翁引用：物神崇拜と『空騒ぎ』

福留，久大
九州大学：名誉教授

<https://doi.org/10.15017/4377816>

出版情報：経済学研究. 87 (4), pp.67-84, 2020-12-25. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：

(研究ノート)

『資本論』の沙翁引用 ——物神崇拜と『空騒ぎ』——

福 留 久 大

- | | |
|----------------|----------------|
| (1) 検討の題材と課題限定 | (4) 二経済学者からの引用 |
| (2) マルクス商品論の摘録 | (5) 二経済学者の価値概念 |
| (3) 『空騒ぎ』からの引用 | (6) 商品を巡る物神崇拜論 |

検討の題材と課題限定

『資本論』第一巻第一章「商品」第四節「商品の物神的性格とその秘密」(Der Fetischcharakter der Ware und sein Geheimnis)の終りに近いところで、マルクスは一部の経済学者が物神崇拜に惑わされて商品世界について誤った見解を抱いていること、その誤解は商品形態、貨幣形態、資本形態と進展するにしたがって深刻化することを述べた後で(正確には、二一分節から成る第四節の第二〇、二一分節で)、商品形態に戻ってそれについての誤解例二つを引用して説明を加える。その説明の末尾に誤解例を象徴するものとして、シェイクスピア(Shakespeare)の『空騒ぎ』(*Much Ado About Nothing*)から短い章句を引用する。誤解例二つの引用それぞれとシェイクスピアからの引用に註記34、35、36が付されている。まずは、これら三つの引用とそれぞれに付された註記を示すことにする。

〈だが、先回りすることをやめて、ここでは商品形態そのものについての例示で十分であろう。もし商品がものを言えるとすれば、商品はこう言うであろう。——われわれの使用価値は人間の関心を惹くかも知れない。使用価値は物としてのわれわれに属するものではない。われわれに物的に属するのはわれわれの価値である。われわれ自身の商品物としての交わりがそれを証明している。われわれはただ交換価値として互いに関係しあうだけだ、と。では、経済学者がこの商品の心をどのように語るかを聞いてみよう。「価値(交換価値)は物の属性であり、富(使用価値)は人間の属性である。価値は、この意味で必然的に交換を含んではいるが、富はそうではない」³⁴。「富(使用価値)は人間の特性であり、価値は商品の特性である。人間や社会は富んでいる。真珠やダイヤモンドには価値がある。……真珠やダイヤモンドは、真珠やダイヤモンドとして価値を有している」³⁵。

真珠やダイヤモンドのなかに交換価値を発見した化学者はまだ一人もいない。ところが、この

化学的実体の経済学的発見者たちは、特別に批判の鋭さを自負して、物の使用価値はその物的属性には関りがなく、それに対してその価値は物としてのそれに属していることを見出すのである。ここで彼らの見解を裏付けるものは、物の使用価値は人間にとって交換なしに、つまり物と人との直接的関係において実現されるが、物の価値は逆にただ交換においてのみ、すなわち一つの社会的過程においてのみ、実現される、という奇妙な事情である。ここで、あのお人よしのドッグベリーを思い出さない人があろうか。彼は夜番のシーコウルに教えて語る——『容貌の善い男であることは境遇の賜だが、読み書きができるということは自然の為す業である』と (Wer innert sich hier nicht des guten Dogberry, der den Nachtwächter Seacoal belehrt; „Ein gut aussehender Mann zu sein ist eine Gabe der Umstände, aber lesen und schreiben zu können kommt von Natur“) ³⁶⁾1)。

註記34. „Value is a property of things, riches of man. Value, in this sense, necessarily implies exchanges, riches do not.“ („Observations on some verbal disputes in Pol. Econ., particularly relating to value, and to supply and demand“, Lond. 1821, p.16)。「価値は物の属性であり、富は人間の属性である。価値は、この意味で必然的に交換を含んではいるが、富はそうではない」(『政治経済学における或る種の用語論争に関する考察、特に価値ならびに供給と需要に関連して』ロンドン、1821年、16頁)。

註記35. „Riches are the attribute of man, value is the attribute of commodities. A man or a community is rich, a pearl or a diamond is valuable ... A pearl or a diamond is valuable as a pearl or diamond.“ (S. Bailey, l.c. p.165sq.)。「富は人間の特性であり、価値は商品の特性である。人間や社会は富んでいる。真珠やダイヤモンドには価値がある。……真珠やダイヤモンドは、真珠やダイヤモンドとして価値を有している」(S・ベイリー、前掲書、165頁以下)²⁾。

註記36. 『考察』の著者およびS・ベイリーは、リカードを、彼が交換価値をただ相対的なものから絶対的なものへ転化したと責めている。実際は逆である。彼は、これらの物、たとえばダイヤモンドおよび真珠が交換価値として持つ外観の相対性を、外観の背後に隠されている真の関係に、人間的労働の単なる表現としてのそれらの相対性に、還元したのである。リカード派の人々が、ベイリーに対して、大雑把で不適切にしか反論できないとすれば、それはただ彼らがりカード自体について、価値と価値形態または交換価値との間の内面的関連を理解できなかったからに他ならない³⁾。

1) 『資本論』第一巻の原典としては、Karl Marx, *Das Kapital*, Erster Band, (*Karl Marx -Friedrich Engels Werke*, Band 23.1986). を用いる。引用に際しては、多くは、引用部分の末尾に (S.97-98) の形式で引用箇所を示す。日本語訳は、岡崎次郎訳、国民文庫版第1分冊の頁を (153~154頁) の形で示す。ただし、訳文は適宜改変されている。

2) ここで前掲書とされているのは、Marx, *Das Kapital*, (S.77; 152頁) で言及されている *A critical dissertation on the nature, measure, and causes of value; chiefly in reference to the writings of Mr. Ricardo and his followers. By the author of essays on the formation and publication of opinions.* London:1825 である。以下の同書からの引用については、引用末尾に頁数を示す。同書には、鈴木鴻一郎訳『リカード価値論の批判』(日本評論社、1947年刊) の邦訳がある。邦訳書の頁数も併記する。ただし、訳文は適宜改変されている。

3) Marx, *Das Kapital*, (S.98; 154頁)。

「一部の経済学者が商品世界に纏いつている物神崇拜によって如何に甚だしく欺かれているか」(Wie sehr ein Teil der Ökonomen von dem der Warenwelt anklebenden Fetishismus getäuscht wird) (S.97; 152頁)。その実例を、貨幣形態や資本形態などより発展した形態に対して「物神的性格が比較的に見通しやすいように見える」(scheint ihr Fetischcharakter noch relativ leicht zu durchschauen) (S.97; 152頁) 商品形態について示すということで、『考察』の著者とS・ベイリーの文章がそれぞれに引用される。そのうえで、『考察』の著者とS・ベイリーの誤解を印象付けるものとしてシェイクスピア『空騒ぎ』からドッグベリーの台詞が引用される。

筆者は、第四節「商品の物神的性格とその秘密」(Der Fetischcharakter der Ware und sein Geheimnis)をマルクスの叙述と反対の方向から読み解くことを試みる。すなわち、平明さを優先させて、最初に『空騒ぎ』からのマルクスの引用を検討し、第二に、『考察』の著者とS・ベイリーの見解を分析し、彼らの見解が如何なる形で「商品世界に纏いつている物神崇拜によって欺かれているか」の解明を通じて、マルクスが意味する物神崇拜概念の一端を明らかにするという順序である。

『資本論』第一巻第一章「商品」は、第一節「商品の二要素 使用価値と価値(価値実体、価値量)」、第二節「商品に表される労働の二重性」、第三節「価値形態または交換価値」、第四節「商品の物神的性格とその秘密」という四つの節で構成されている。第一節で、商品の使用価値と交換価値の説明からはじめて、価値実体としての労働の説明に及ぶ。第二節で、具体的有用労働と抽象的人間労働とから成る労働の二重性の問題が説かれる。第三節で、価値形態の発展の論理的過程を追跡することによって、貨幣形態に結晶する価値性格の構造が明らかにされる。この三つの節を受けた第四節は、商品の物神性の根拠を、他の非商品経済社会との対比において解明するものであるが、同時に第一章の終節として、第三節までの諸問題の再説・詳説・補足の役割も担っている。本稿では、第四節を構成する二一分節のうち商品の物神的性格の解明を直接の課題とする第一八分節～二一分節の検討から始めて、第一分節～第五分節の検討で締め括る形式を取ることになる。

マルクス商品論の摘録

『考察』の著者とS・ベイリーの見解を分析するにあたって、『資本論』で展開されるマルクスの商品論の概要を把握しておくことは欠かせない。論評に及ぶことは避けて、概要を何うに足る文章を箇条書き的に摘録しておきたい。

(1) 〈「資本主義的生産様式が支配的に行われている社会の富は、一つの『巨大な商品の集まり』として現われ、一つ一つの商品は、その富の基本形態として現れる。それゆえ、われわれの研究は商品の分析から始まる」(Der Reichtum der Gesellschaften, in welchen kapitalistische Produktionsweise herrscht, erscheint als eine „ungeheure Warensammlung“, die einzelne Ware als seine Elementarform. Unsere Untersuchung beginnt daher mit der Analyse der Ware.)〉(S.49; 71頁)。「商品」について。〈「売ることを予定されている物品、すなわち商品」(ein zum Verkauf bestimmter Artikel, eine Ware)〉(S.201; 326頁)。

(2) 〈「商品は、まず第一に、外的対象であり、その属性によって人間の何らかの種類の欲望を満足させるものである」(Die Ware ist zunächst ein äußerer Gegenstand, ein Ding, das durch seine Eigenschaften menschliche Bedürfnisse irgendeiner Art befriedigt.)〉(S.49; 71頁)。

(3) 〈「或る一つの物の有用性は、その物を使用価値にする」(Die Nützlichkeit eines Dings macht es zum Gebrauchswert.)〉(S.50; 73頁)。

(4) 〈「使用価値は、富の社会的形態が如何なるものであるかに関りなく、富の素材的な内容を成している。われわれが考察しようとする社会形態にあつては、それは同時に素材的な担い手になっている——交換価値の」(Gebrauchswerte bilden den stofflichen Inhalt des Reichtums, welches immer seine gesellschaftliche Form sei. In der von uns betrachtenden Gesellschaftsform bilden sie zugleich die stofflichen Träger des – Tauscherts.)〉(S.50; 73頁)。

(5) 〈「交換価値は、まず第一に、或る一種類の使用価値が他の種類の使用価値と交換される量的関係すなわち比率——時および所と共に絶えず変動する関係——として現れる」(Der Tauschwert erscheint zunächst als das quantitative Verhältnis, die Proportion, worin sich Gebrauchswerte einer Art gegen Gebrauchswerte anderer Art austauschen, ein Verhältnis, das beständig mit Zeit und Ort wechselt.)〉(S.50; 74頁)。

(6) 〈「商品Aの価値は、質的には、商品Bの商品Aとの直接的交換可能性によって表現される。それは、量的には、一定分量の商品Bの、与えられた分量の商品Aとの交換可能性によって表現される。他の言葉で言えば、一商品の価値は『交換価値』としてのその表示によって自立的に表現される」(Der Wert der Ware A wirt qualitativ ausgedrückt durch die unmittelbare Austauschbarkeit der Ware B mit der Ware A. Er wirt quantitativ ausgedrückt durch die Austauschbarkeit eines bestimmten Quantum der Ware B mit dem gegebenen Quantum der Ware A. In andren Worten: Der Wert einer Ware ist selbständig ausgedrückt durch seine Darstellung als „Tauschwert“.)〉(S.74-5; 115頁)。

(7) 〈「この章のはじめに、普通の言い方で、商品は使用価値であるとともに交換価値であると言ったが、これは厳密に言えば間違いだつた。商品は使用価値または使用対象であるとともに『価値』なのである。商品は、その価値が商品の現物形態とは違った独特の現象形態、すなわち交換価値という現象形態を持つとき、そのあるがままのこのような二重物として現れる」(Wenn es im Eingang dieses Kapitels in der gang und gäben Manier hieß: Die Ware ist Gebrauchswert und Tauschwert, so war dies, genau gesprochen, falsch. Die Ware ist Gebrauchswert oder Gebrauchsgegenstand und „Wert“. Sie stellt sich dar als dies Doppelte, was sie ist, sobald ihr Wert eine eigne, von ihrer Naturalform verschiedene Erscheinungsform besitzt, die des Tauscherts.)〉(S.75; 115頁)。

(8) 〈「使用価値としての商品は、或る特殊な欲望を満足させ、素材的な富の一つの特殊な要素を成している。商品の価値は、素材的な富のすべての要素に対する引力の程度を表わし、したがってその商品の所有者の社会的な富の大きさを表している」(Die Ware als Gebrauchswert befriedigt ein besonderes Bedürfnis und bildet ein besonderes Element des stofflichen Reichtums. Aber der Wert der Ware mißt den Grad ihrer Attraktionskraft auf alle Elemente des stofflichen Reichtums, daher den gesellschaftlichen

Reichtum ihres Besitzers.)〉(S.147; 234頁)。

(9) 〈「或る使用価値または財貨が価値をもつのは、ただ抽象的人間労働がそれに対象化または物質化されているからでしかない。ではその価値の大きさはどのようにして計られるのか？ それに含まれている『価値を形成する実体』の量、すなわち労働の量によってである」(Ein Gebrauchswert oder Gut hat also nur einen Wert, weil abstrakt menschliche Arbeit in ihm vergegenständlicht oder materialisiert ist. Wie nun die Größe seines Werts messen? Durch das Quantum der in ihm enthaltenen „wertbildenden Substanz“, der Arbeit.)〉(S.53; 78頁)。

『空騒ぎ』からの引用

先の『空騒ぎ』(*Much Ado About Nothing*)からの引用については、次の編集者註釈がついている。「シェイクスピア『空騒ぎ』第3幕第3場」(Shakespeare, „Viel Lärm um nichts“, 3. Aufzug, 3. Szene.)⁴⁾ マルクスによる引用部分は、第3幕第3場が始まってすぐのところに在る。ここでは、『シェイクスピア著・坪内逍遙訳：ザ・シェイクスピア——全戯曲(全原文+全訳)』に依って、第3場冒頭から引用部分までを示すことにする。

SCENE III. *A street*

Enter Dogberry and Verges with the Watch.

Dogberry. Are you good men and true ?

Verges. Yea, or else it were pity but they should suffer salvation, body and soul.

Dogberry. Nay, that were a punishment too good for them, if they should have any allegiance in them, being chosen for the prince's watch.

Verges. Well, give them their charge, neighbour Dogberry.

Dogberry. First, who think you the most desartless man to be constable ?

First Watch. Hugh Otecake, sir, or George Seacole : for they can write and read.

Dogberry. Come hither, neighbour Seacole. God hath blessed you with a good name: to be a well-favoured man is the gift of fortune: but to write and read comes by nature.

「第三場 街上

警保官ドッグベリーが其同役バーヂーズと共に部下の番卒共を従へて出る。(当時の警保官は、無学な癖に、妙にむづかしい言語を使ひたがったものだ。恰も明治初年の邏卒なぞが変な漢語を振廻したのに似てゐる。其訛りのをかきさを、例によって作者が喜劇要素に利用してゐる)。

ドッグ おまひたちは正直な者か？

バーヂ はい、正直者ですよ。でなければ霊肉共に、とうに御救済(御厳罰)を受けてをらんけ

4) Marx, *Das Kapital*, (S.848; 408頁)。

りゃなりませんのぢゃ。

ドッグ いいや、それぢゃ御罰が上等過ぎるですよ、御領主の番卒でごわすからね、苟も忠節を存じてる場合には。(と甚だ辻褄の合はないことをいふ)。

バーヂ では、ドッグベリーさん、お盼^{いひつ}付けなすって下さい。

ドッグ こら、先ず、警保官にだれが最も無敵対(無類適当)と思ふかね?

第一の番卒 ヒュー・オートケーキカヂョーヂ・シーコールでございますよ。二人とも読み書きが出来るですからね。

ドッグ シーコールどん、ここへ来なさい。さてさて、えい名前を神様から頂いたもんぢゃなう。およそ容貌の善悪は運命の賜であるんぢゃが、読むと書くとは自然にして具^{そなは}るんぢゃから…。⁵⁾

ドッグベリーやバーヂスの特徴として、盛んに言い間違いをすることが挙げられる。ここまでの台詞のなかで、坪内逍遙は、言葉の言い間違いを三カ所指摘している。「御救済(御厳罰)」、「無敵対(無類適当)」、「甚だ辻褄の合はないこと」とされる「忠節」がそれである。「御救済(御厳罰)」については、‘salvation’(救済)が‘damnation’(地獄落ち)と言うべきところを言い間違えたもの、「無敵対(無類適当)」については、‘the most desartless man’(最も不適任なるもの)が‘the most deserving man’(最も適任なるもの)と言うべきところを言い間違えたもの、「甚だ辻褄の合はないこと」とされる「忠節」については、‘allegation’(忠節、忠誠、忠順)が‘disloyalty’(不忠)と言うべきところを言い間違えたものと考えられる⁶⁾。

これら言葉の言い間違いに対して、マルクスが引用するのは、事実の言い間違いを含む台詞である。シェイクスピアの原文とマルクスの引用を併記すると、次のようになる。

Shakespeare: “to be a well-favoured man is the gift of fortune: but to write and read comes by nature.”

「およそ容貌の善悪は運命の賜であるんぢゃが、読むと書くとは自然にして具るんぢゃから」。

Marx: „Ein gut aussehender Mann zu sein ist eine Gabe der Umstände, aber lesen und schreiben zu können kommt von Natur“

「容貌の善い男であることは境遇の賜だが、読み書きができるということは自然の業である」。

両方を照合してみると、シェイクスピアの「運命の賜」(the gift of fortune)という語句をマルクスが「境遇の賜」(eine Gabe der Umstände)と置き替えていることが注目される⁷⁾。通例ならば、英語

5) 『シェイクスピア著・坪内逍遙訳：ザ・シェイクスピア——全戯曲(全原文+全訳)』(第三書館、1989年刊、487頁)。

6) ‘salvation’(救済)に対する‘damnation’(地獄落ち)、「the most desartless man’(最も不適任なるもの)に対する‘the most deserving man’(最も適任なるもの)、「allegation’(忠節、忠誠、忠順)に対する‘disloyalty’(不忠)、この三語のうち第一については松岡和子訳『から騒ぎ』(ちくま文庫、2008年刊、96頁)、河合祥一郎訳『新訳・から騒ぎ』(角川文庫、2015年刊、70頁)の訳注に依る。第二・第三については松岡の同書97頁の指摘に依る。坪内が「甚だ辻褄の合わないことを言う」と註釈した台詞の翻訳としては、「いや、それくらいの罰では軽すぎる、御領主様の夜番に選ばれながら、かりにも忠順の心をいだくようでは」(小野協一訳『空騒ぎ』筑摩書房、シェイクスピア全集2、1974年刊、所収、35頁)が要を得ている。

(fortune)「運」「運命」「運命の女神」に対応するドイツ語 (Glück)「運」「運命」「運命の女神」に翻訳されるはずのところ、少し距離を置いて (Umstände)「事情」「境遇」の語に置き換えている。

それに対して、他の部分では、S (to be a well-favoured man) を M (Ein gut aussehender Mann zu sein)「容貌の善い男であること」に、S (to write and read) を M (lesen und schreiben zu können)「読むこと書くこと (ができる)」に、S (comes by nature.) を M (kommt von Natur)「自然に具わる (= 自然の業である)」に、という具合に、ほぼ一語一語対応する形で英語をドイツ語に翻訳している⁸⁾。

原文の「運命」を「境遇」に代えたことで、この台詞は事実を巡って二つの誤りを含むことになる。「容貌の善い男であること」は、美男美女の両親から生まれた「運命の賜物」だというのが事実だが、「境遇」に依ると言う風に事実と反対のことが述べられる。逆に、「読み書きができるということ」は、

7) 英語“fortune”の意味を *Oxford English Dictionary* (以下 OED と略す) で探ると、次の如くである。1. Chance, hap, or luck, regarded as a cause of events and changes in men's affairs. Often personified as a goddess, ... 2. A chance, hap, accident; an event or incident befalling any one, an adventure. 3. The chance or luck (good or bad) which falls to any one as his lot in life or in a particular affair. 4. (=good fortune): Good luck; success, prosperity. 5. One's condition or standing in life; often a prosperous condition, as in *to make one's fortune* = to win a good position in the world. 「偶然」「運」「運命」「運命の女神」の意味が、1. 冠詞なしの場合、2. 不定冠詞付きの場合、3. 定冠詞付きの場合に分けて説明された後に、4. に至って「運」の好転による「幸運」「成功」「繁栄」が現れる。その延長上に5. 物質的に恵まれた状態、立場、境遇が現れることになる。この辺りの意味に着目してマルクスは (Umständ)「事情、状況、境遇」と翻訳したのかも知れない。そう考えると、全く異なる意味のドイツ語に翻訳したわけでは無いとも言える。

8) 二点ほど注意を要するのは、(to be a well-favoured man)「容貌の善い (= 整った) 男であること」という台詞である。第一に、(favoured)「好意・好感を持たれている」の意味から考えて、論理的には (a well-favoured man)「立ち居振る舞いの立派な男」と内面の美質を表現ことも可能だと思われる。そうすると、ドッグベリーは「立ち居振る舞いの立派なのは運の賜、読み書きは自然に具わるもの」と、前半も後半も事実とは逆を言っていることになる。始終、言葉を誤用するドッグベリーの役柄にも適しているとも考えられる。しかし、“well-favoured”の意味は独特で、その種の論理的思考の枠外にあるらしい。OED に依ると“Of a person: having an attractive appearance; good-looking, handsome”つまり、容貌の良さの意味に限られている。英和辞書でも、合成語では「…の顔つきをした」という意味を持ち、(well-favoured)「容貌の整った」(ill-favoured)「不器量な」との説明が与えられている。それ故、マルクスが (Ein gut aussehender Mann zu sein)「容貌の善い男であること」とドイツ語に移したのが正解ということになる。

注意点の第二は、(well-favoured)「容貌の整った、容貌の善い」を「男振りの良い」と日本語翻訳する例が見られることである。昭和初期に全40巻のシェイクスピア全集を刊行した坪内逍遙の台詞「およそ容貌の善悪は運命の賜であるんぢやが、読むと書くとは自然にして具るんぢやから」以外の翻訳を幾つか挙げてみる。

* 福田恒存『空騒ぎ』「男振りの良し悪しは天の賜物なりといえども、読み書きはおのずと身に附くものだ」(新潮文庫、1972年刊、217～218頁)。

* 小田島雄志『から騒ぎ』「りっぱな容貌は運命の賜物だが、読み書きは生来の才能だ」(シェイクスピア全集 I、白水社、1973年刊、178頁)。

* 小野協一『空騒ぎ』「容貌のよしあしは神の賜だが、読み書きは生来具わったものだ」(シェイクスピア全集 2、筑摩書房、1974年刊、34頁)。

* 松岡和子『から騒ぎ』「男の顔の良いのは運命の女神の贈り物だ、しかし読み書きが出来るのは生まれつきだ」(ちくま文庫、2008年刊、97頁)。

* 河合祥一郎『新訳 から騒ぎ』「顔のよいのは運命の恵みだが、読み書きは生まれつきの才能だ」(角川文庫、2015年刊、71頁)。

* 喜志哲雄『から騒ぎ』「男前になるのは運次第だが、読み書きの能力はもって生まれた代物だ」(岩波文庫、2020年刊、90頁)

「男ぶり」「男振り」は、「男としての風采・器量」(堂々とした男振り)や「男としての面目」(仲裁に成功して男振りあげる) (『岩波国語辞典』) という例、「男性として好ましい風采・顔つき、おとこまえ」(『新明解国語辞典』) という例に見られるように、元来は、「立ち居振る舞いの立派なこと」という内面の美質を表現する言葉だと考えられる。「①男子としての風采・容姿または面目、おとこまえ。②美男、好男子」(『広辞苑』) のように、「美男」の意味を加える例もあるが、あくまで二次的用例としてである。そう考えると、「男振り」や「男前」という訳語には正確さの点で疑問が残る。

シェイクスピア劇上演当時においては、現代とは大きく異なり、簡単に身につけられる能力ではなかった。周囲に文字を教える大人がいるとか、学校に行けるだけの経済的余裕があるなど、子供の置かれた「境遇」に依るところが大きいわけで、決して「自然に具わる（＝自然の業である）」わけではなかった。

シェイクスピアの原文“to be a well-favoured man is the gift of fortune: but to write and read comes by nature.”では、台詞の前半「容貌の善い男であることは運命の賜物」という部分は事実即ししており、事実の間違いはない。台詞の後半「読むと書くとは自然に具わる」という部分が事実反ししており、間違いの文句ということになる。マルクスのドイツ語翻訳 „Ein gut aussehender Mann zu sein ist eine Gabe der Umstände, aber lesen und schreiben zu können kommt von Natur“ では、台詞の前半「容貌の善い男であることは境遇の賜だ」も、台詞の後半「読み書きができるということは自然の業だ」も二つながら事実反しているわけで、この台詞に二つの事実の間違いを含ませたということになる。しかもその間違いは、述語部分を入れ替えて「容貌の善い男であることは生まれつきだ」「読み書きが出来るということは境遇の賜物だ」とすれば、事実即した常識的な物言いになる。そういう次第で、ここでのマルクスの言葉は、先行する二人の経済学者——『考察』の著者とS・ベイリーとが、「富」(riches)と「価値」(value)を巡って、それぞれに二つの誤解を表明していることに対して、その例示としての的確なものとなっている。シェイクスピアの台詞を直訳すれば、間違いは一つだけに限定されて仕舞い、二経済学者の誤解を象徴するものとしては、不十分なものに終わったに相違ない⁹⁾。

二経済学者からの引用

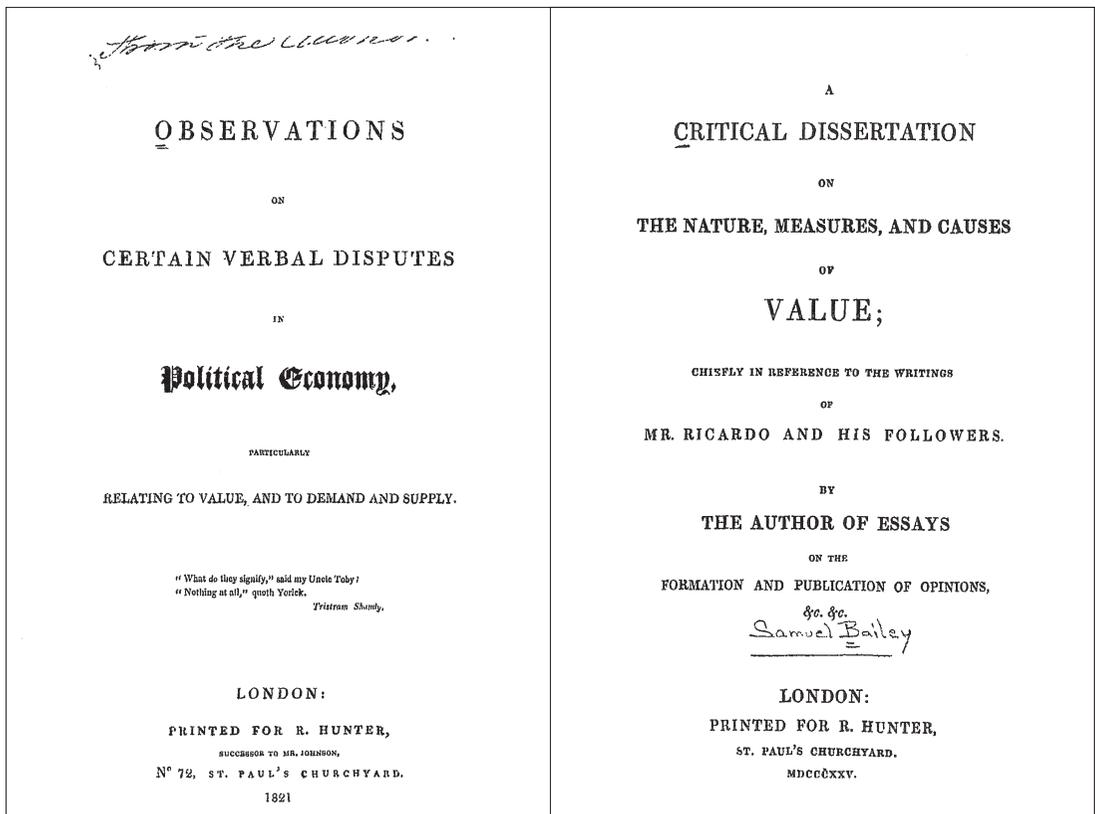
マルクスは、「商品世界に纏いつている物神崇拜によって甚だしく欺かれている」(von dem der Warenwelt anklebenden Fetishismus getäuscht wird) 経済学者として、『政治経済学における或る用語論争に関する考察、特に価値ならびに需要供給に関連して』(Observations on certain verbal disputes in

9) シェイクスピアの台詞をマルクスが距離を置いた形でドイツ語に翻訳した点に注意を怠ったために、あるいは(well-favoured = gut aussehender)「容貌の整った、容貌の善い」を「男振りの良い」と翻訳したために、『資本論』の邦訳書において不正確な部分を残したものが散見される。

- * 向坂逸郎「立派な容貌の男であるのは境遇の賜物だが、読み書きが出来るということは生れつきだ」『資本論』第一卷第一分冊(岩波文庫、1947年刊、160頁)。注意を要する弱点を回避できた例。
- * 長谷部文雄「男ぶりがよいということは境遇の賜ものだが、読み書きが出来るということは生まれつきだ」『資本論』第一部第一分冊(青木文庫、1952年刊、190頁)。「男ぶり」が不正確。
- * 岡崎次郎「およそ容貌の善悪は運命の賜であるんぢやが、読むと書くとは自然にして具るんぢやから…」『資本論』第一卷第一分冊(国民文庫、1972年刊、154頁)。シェイクスピアの台詞の坪内訳を転用したのでマルクスの翻訳としては不適當。
- * 資本論翻訳委員会「男ぶりのいいのは運の賜物だが、読み書きは自然にそなわるものだ」『資本論』第一卷第一分冊(新日本出版社、1982年刊、142頁)。シェイクスピアの台詞の小田島訳を一部改変しつつ転用したのでマルクスの翻訳としては不適當。
- * 今村仁司・三島憲一・鈴木直「風采がいいのは境遇のたまものだが、読み書きができるのは生れつきのものだ」『資本論』第一卷(上)(筑摩書房、2005年刊、127頁)。「風采」は、身なり、なりふりを意味して、容貌の善さとはやや異なる。
- * 中山元「容貌のよしあしは神の賜物だが、読み書きは生来そなわったものだ」『資本論』第1卷I(日経BP社、2011年刊、141頁)。シェイクスピア原文に誤誘導されて、「境遇」とすべきところを「神」と誤訳した。

Political Economy, particularly relating to value, and to demand and supply) の匿名者と『価値の性質・尺度および原因に関する批判的論究、主としてリカード氏とその追従者の著作に関連して』(*A critical dissertation on the nature, measure, and causes of value; chiefly in reference to the writings of Mr. Ricardo and his followers.*) の著者 S・ベイリー (Samuel Bailey) を挙げた¹⁰⁾。

この二人の見解を検討することを通して物神崇拜 (Fetishismus) の様相を明らかにする狙いからである。マルクスは、本文と註記を関連付けつつ、二種類の説明を行っている。第一の種類の説明は、次のような三段階で構成されている。第一に、引用の原典の英文を註記34、35で示す。第二に、本文においてその英文をドイツ語に翻訳したものを掲げる。第三に、その引用文の真相を抉ったマルクス独自の解釈を施す——そういう三種類の文章が提示される。第二の種類は、註記36における二経済学者への批判である。この註記36に関連する説明については次節に譲り、本節では第一の種類の説明を検討する。



10) 匿名者の1821年刊行の著作名は、正確には、*Observations on certain verbal disputes in Political Economy, particularly relating to value, and to demand and supply*, London: 1821. である。前出のマルクスの引用では、“certain”が“some”に誤記され、“demand”と“supply”の配置が逆になっている。以下における同書からの引用については、引用末尾に頁数を示す。Samuel Baileyの著作 *A critical dissertation on the nature, measure, and causes of value; chiefly in reference to the writings of Mr. Ricardo and his followers. By the author of essays on the formation and publication of opinions.* London: 1825 も匿名者の著作として発行されている。二著作の表紙複写参照。

第一の種類の説明について、そのなかの第一の文章は、先に註記34、35として示しているので、ここでは第二と第三の文章とを示して、その対応関係の裡にマルクスの解釈の妥当性を見ることにする。

匿名者は言う。„Welt (Tauschwert) ist Eigenschaft der Dinge, Reichtum (Gebrauchswert) des Menschen. Wert in diesem Sinn schließt notwendig Austausch ein, Reichtum nicht.“³⁴「価値(交換価値)は物の属性であり、富(使用価値)は人間の属性である。価値は、この意味で必然的に交換を含んではいるが、富はそうではない」(S.97; 153頁)。

ベイラーは言う。„Reichtum (Gebrauchswert) ist ein Attribut des Menschen, Wert ein Attribut der Waren. Ein Mensch oder ein Gemeinwesen ist reich; eine Perle oder ein Diamant ist wertvoll ... Eine Perle oder ein Diamant hat Wert als Perle oder Diamant.“³⁵「富(使用価値)は人間の特性であり、価値は商品の特性である。人間や社会は富んでいる。真珠やダイヤモンドには価値がある。……真珠やダイヤモンドは、真珠やダイヤモンドとして価値を有している」(S.97; 153～4頁)。

これら両者の見解を示す際に、マルクスが「富(Reich)」を「使用価値(Gebrauchswert)」に読み替え、匿名者については「価値(Wert)」を「交換価値(Tauschwert)」に限定していることが注目される。こういう操作を加えたうえで、マルクスは、二経済学者の見解をこう要約する。„Die ökonomischen Entdecker dieser chemischen Substanz, die besondern Anspruch auf kritische Tiefe machen, finden aber, daß der Gebrauchswert der Sachen unabhängig von ihren sachlichen Eigenschaften, dagegen ihr Wert ihnen als Sachen zukommt.“「この化学的実体の経済学的発見者たちは、特別に批判の鋭さを自負して、物の使用価値はその物的属性には関りがないこと、それに対してその価値は物としてのそれに属していることを見出すのである」(S.98; 154頁)。つまり、物象の使用価値は物象に関りなくて、物象の価値(交換価値)は物象に属している、と二経済学者が主張しているというのがマルクスの理解である。

そして、二経済学者の見解は、商品形態の真相を物語る次のような「奇妙な事情(der sonderbare Umstand)」と真逆の顛倒したものだ、とマルクスは結論付ける。„Was sie hierin bestätigt, ist der sonderbare Umstand, daß der Gebrauchswert der Dinge sich für den Menschen ohne Austausch realisiert, also im unmittelbaren Verhältnis zwischen Ding und Mensch, ihr Wert umgekehrt nur im Austausch, d.h. in einem gesellschaftlichen Prozeß.“「ここで彼らの見解を裏付けるものは、物象の使用価値は人間にとっては交換なしに、つまり物象と人間との間の直接的関係において自らを実現するが、その反対に、物象の価値は交換すなわち一つの社会的過程においてのみ自らを実現する、という奇妙な事情である」(S.98; 154頁)。

この「奇妙な事情」について、少し立ち入ってみる。物象(a)の使用価値はその所有主体(A)の欲求を直接に満たすことが出来る。その意味でここでの使用価値は物象(a)に属している。物象自体に内在している。それに対して商品(a)の価値は、他の商品、例えば商品(b)を交換に引き寄せる力(交換可能性)を意味しており、その使用価値によって商品(b)の所有主体(B)の欲求に応えることを梃子にして、交換を実現してこそ本分が発揮できるものである。「豚に真珠」「猫に小判」と言われるように、人間主体が消え去れば、真珠や小判の交換可能性も消滅する。その意味でここでの価値は物象自体に内在しているわけでは無い。あくまで人間主体との相関関係において存在を有するも

のである。この第一章第四節で例示される「共同的な、直接に社会化された労働 (die gemeinsame, d.h. unmittelbar vergesellschaftete Arbeit)」、自分の必要のために穀物や家畜や糸やリンネルや衣類などを生産する「農民家族の素朴な家父長制的な勤労 (die ländlich patriarchalische Industrie einer Bauernfamilie)」について言えば、その生産物は「家族に対して家族労働の種々の生産物として相対するが、しかしそれら自身が互いに商品として相対しはしない」(S.92; 144頁)。したがって、それらの生産物が交換可能性としての価値を有することも無いのである。

こうして商品の使用価値は物としてのそれに属しており、それに対して価値はその物的特性とは関りがなく人間主体とのかかわりのなかで存在することが商品形態の特質であるから、「使用価値は人間の特性であり、価値は物象の特性である」と言い、「物の使用価値はその物的属性には関りがなく、それに対してその価値は物としてのそれに属していることを見出す」二経済学者の見解は、真実の在り様と顛倒したものだということになる。その顛倒性を際立たせるために選択されたのが、「容貌の善いことは境遇の賜物であり、読み書きの能力は自然の業である」と言うドッグベリーの台詞の顛倒性だったと考えられる。

二経済学者の価値概念

前節においてマルクスは、匿名者が、„Wert (Tauschwert) ist Eigenschaft der Dinge, Reichtum (Gebrauchswert) des Menschen.“ 「価値 (交換価値) は物の属性であり、富 (使用価値) は人間の属性である。」(S.97; 153頁) と述べ、ベイリーが、„Reichtum (Gebrauchswert) ist ein Attribut des Menschen, Wert ein Attribut der Waren.“ 「富 (使用価値) は人間の特性であり、価値は商品の特性である」(S.97; 153頁) と述べた、として議論を進めた。

二つの英語原文 “Value is a property of things, riches of man.” 「価値は物の属性であり、富は人間の属性である」および “Riches are the attribute of man, value is the attribute of commodities.” 「富は人間の特性であり、価値は商品の特性である」と対比すればすぐ判明するように、マルクスは “Value” を “Wert (Tauschwert)” に、“Riches” を “Reichtum (Gebrauchswert)” に翻訳している。その際に問題となるのは、マルクスの場合には (あるいは、リカード的には)、“Wert”=“(Tauschwert)” 及び “Reichtum”=“(Gebrauchswert)” という関係が認められるにしても、匿名者及びベイリーにおいては、この同値関係が必ずしも適用されないことである。彼らは、“Value” や “Riches” にリカードやマルクスとは基本的に異なる意味内容を含めているのである。

匿名者もベイリーも歩調を合わせて、リカード『経済学および課税の原理』第20章「価値と富、両者を区別する特性」(Value and Riches, their Distinctive Properties) で展開されている見解に批判を加えている。マルクスは、彼らのそこでの議論を対象にして、前述の本文での検討、ならびに後述の註記36の検討を行っている。

ベイリーは、価値概念を軸にした商品論について、次のような見解を示している。(If the value of an object is its power of purchasing, there must be something to purchase. Value denotes consequently

nothing positive or intrinsic, but merely the relation in which two objects stand to each other as exchangeable commodities.) 「対象物の価値がその購買力だとすると、購買されるべきものが存在しなければならない。したがって価値は絶対的または内在的なものではなくて、二つの対象物が交換されうる商品として相互に対立する関係を指すに過ぎない。」(pp.4-5; 29頁)。

〈(The distinction between riches and value is sufficiently obvious, riches signifying the commodities themselves (with one or more accessory ideas annexed), and value denoting the relation in exchange between any of these commodities.) 「富と価値の区別は十分に明らかである。富とは諸商品それ自体を意味するのであり (一、二の補足的観念を追加してであるが)、価値とはこれら諸商品のいずれかとの間の交換的関係を指すのである」〉 (p.162; 149頁)。

〈(Whatever difficulty may be found in furnishing a good and complete definition of riches, there can be none in establishing the difference between the terms riches and value, as used in the science of Political Economy. Riches are the attribute of men, value is the attribute of commodities. A man or a community is rich; a pearl or a diamond is valuable. He possesses riches who is the owner of commodities which themselves possess value; and, further, he is rich in proportion to the value of the objects possessed.) 「富の優れた完全な定義を与えることが如何に困難であっても、経済学で用いられるような富という言葉と価値という言葉との相違を明確にするのには何らの困難も有り得ない。富は人間の特性であり、価値は商品の特性である。人間または社会は富んでいる。真珠またはダイヤモンドは価値がある。それ自体価値をもっている商品の所有者は富を所有している。さらにまた、所有している対象物の価値に比例して富んでいるのである」〉 (pp.165-6; 151頁)。

〈(With regard to heterogeneous commodities, there are in fact only two conceivable *criteria* of riches: one, the utility of any possessions; the other, their value. The first is in the highest degree unsteady and indeterminate, and altogether inapplicable. ... Value, therefore, is the only criterion of riches which is left to us.) 「異質の諸商品については、富の基準となるものは事実上二つしか考え及ばない。一つは、所有物の効用であり、他は、その価値である。前者は、何にも増して不安定で不確定であり、全く適用できないものである。…したがって、価値はわれわれに残された唯一の富の基準である」〉 (p.168; 152～3頁)。

こうしたベイリーの見解から浮き彫りになるのは、富とは諸商品の集合体であり、商品は富の構成要素だということ、異種商品で構成される集合体としての富の豊かさの「基準 (criteria)」を成すのは、「効用 (utility)」としての使用価値ではなくて、価値であり包含される諸商品の価値に比例して富は増大すること、その価値は絶対的または内在的なものではなくて、二商品の交換比率という相対的なものにすぎないことである。

リカードは、問題の第20章「価値と富、両者を区別する特性」の冒頭で、こう述べる。〈(“A man is rich or poor,” says Adam Smith, “according to the degree in which he can afford to enjoy the necessaries, conveniences, and amusements of human life. Value, then, essentially differs from riches, for value depends not on abundance, but on the difficulty or facility of production.”) 「人の貧富は、彼が人間生活の必需品、便宜品、娯楽品を享受しうる程度に応ずる」とアダム・スミスは言っている。そうだとすれば、価値

は本質的に富とは異なる。なぜなら、価値は豊富の度合に依存するのではなく、生産の難易に依存するからである」(p.273; 87頁)。さらに、少し進んだ所でこう付け加えている。〈(A man is rich or poor, according to the abundance of necessaries and luxuries which he can command; and whether the exchangeable value of these for money, for corn, or for labour, be high or low, they equally contribute to the enjoyment of their possessor.) 「人の貧富は、彼が支配できる必需品および奢侈品の分量に依る。そして、それらの物の、貨幣、あるいは穀物、または労働に対する交換価値が高かろうと低かろうと、それらの物はその所有者の享楽に同じように役立つだろう」(pp.275-6; 90頁)¹¹⁾。

このリカードの文章で「必需品、便宜品、娯楽品を享受しうる」とか、「所有者の享楽に役立つ」という表現において、彼が富を使用価値の観点で捉えていることが読み取れる。そのうえでリカードは富と価値とを明確に区別するわけで、ベイリーの見解と対立することが明らかになる。

当然のことながら、ベイリーは、富と価値の区別について、リカードを批判することになる。

〈(Mr. Ricardo, nevertheless, has been singularly unfortunate in his attempt to discriminate them. His elaborate chapter, which contains it, appears to me to be a remarkable tissue of errors and unmeaning conclusions, arising from his fundamental misconception of the nature of value. Throughout the whole of this chapter, he speaks of value as the positive result of labour: whence it follows, that the same quantity of labour must always produce the same value, however much its productive powers may have increased. Riches, therefore, may be indefinitely multiplied, while no more labour is employed; but the value of the riches, under this condition, remains invariably the same.) 「リカード氏はこれらを区別しようとして奇妙にも不幸な結果に終わっている。彼がこの区別を詳細に論じた章(第20章——引用者)は、私には、誤謬と無意味な結論との驚くべき連続であるように見える。その原因は、彼が価値の性質について根本的に誤解しているところに在る。この章全体を通じて、彼は価値を労働の積極的成果として語っている。だからこそ、労働の生産力が如何に著しく増加しても、同一量の労働は常に同一価値を生産するのである。したがって富は、より多くの労働が用いられなくても、無限に増大されるかもしれない。しかし、富の価値は、この条件下では、変わることなく同一なのである」(p.163; 149頁)。

『考察』の匿名の著者も、富や価値について相対的なものとして、他との比較のなかで論ずる姿勢を堅持する。マルクスが引用した部分の前後を示してみる。〈(“Value, then,” Mr. Ricardo observes, p.340, “essentially differs from riches.” One would think, it could hardly have been supposed they were the same. Value is a property of things, riches of men. Value, in this sense, necessarily implies exchange, riches do not. Mr. Ricardo derives the above inference from the position in Smith, that “a man is rich or poor according to the degree in which he can afford to enjoy the necessaries, conveniences, and amusements of human life.” I would here observe, that I believe the term rich and poor, as commonly used, imply a comparison of one man

11) David Ricardo. *On the Principles of Political Economy and Taxation*. (*The Works and Correspondence of David Ricardo*, edited by Piero Sraffa with the collaboration of M. H. Doob, Cambridge University Press, 1951-55. Volume I). 邦訳は、羽鳥卓也・吉澤芳樹『経済学および課税の原理』下巻(岩波文庫、1987年刊)。引用箇所は引用末尾に頁数を示す。

with another.) 「リカード氏は、340頁で、『価値は本質的に富とは異なる』と述べている。それらが同じだと思う人はほとんどいないと考えられる。価値は物の属性であり、富は人間の属性である。価値は、この意味で必然的に交換を含んではいるが、富はそうではない。リカード氏は、上記の結論を、スミスの『人の貧富は、彼が人間生活の必需品、便宜品、娯楽品を享受しうる程度に应ずる』という見解から導き出している。私は、ここで、『豊か』とか『貧しい』という言葉は、通常は、或る人と別の人との比較において用いられるのだと強調しておきたい」(pp.16-7)。

このように比較の視点を強調する匿名者は、リカードの価値概念についても、相対的比較における議論は許容する(場合によっては称賛する)けれど、相対的比較の領域を踏み出す気配が見えると論難に転じるのである。(But the beauty of Mr. Ricardo's reasonings, for the most part, is, that he does not speak of it "in a positive sense;" but merely asserts, that the relative quantities of labour determine the relative value, i. e. the rate at which the two commodities will exchange with each other. ... That Mr. Ricardo has departed from his original use of the term value, and has made of it something absolute, instead of relative, is still more evident in his chapter, entitled "Value and Riches, their distinctive Properties.") 「リカード氏の論理の美しさは、大部分の場合、価値を『積極的意味において』語るのではなくて、相対的労働量が相対的価値を、すなわち、相対的労働量が二つの商品が相互に交換される比率を、決定する、と主張する点に認められるのである。…ところが、リカード氏は、価値という言葉の本来の使用から逸脱して、価値を相対的なものの代わりに、何か絶対的なものに仕立てて仕舞った。『価値と富、両者を区別する特性』と題する章で、そのことがいよいよ明確になっている」(pp.15-6)。

以上のように、マルクスの引用に関連する二経済学者の見解を辿ってきて、次の二点を確言することができる。第一に、シェイクスピア『空騒ぎ』のドッグベリーの台詞の翻訳「容貌の善いのは境遇の賜物だが、読み書きができるのは自然の業である」における事実との顛倒事例二つに照応させて、マルクスは二経済学者の見解を、「富 (Reich)」を「使用価値 (Gebrauchswert)」に読み替えて「物象の使用価値はその物象的属性には関りがなく、それに対してその価値は物象としてのそれに属していることを見出すのである」と整理して、顛倒事例二つがそこに映し出されているとした。しかしながら、「富」を「使用価値」と見なすのはリカードであって、ベイリーではなかった。ベイリーは、「価値はわれわれに残された唯一の富の基準である」と言い、「使用価値」に相当する「効用」についてはこれを排除している。したがって二経済学者の見解について「富 (Reich)」 = 「使用価値 (Gebrauchswert)」という関係を認めるのは、正確な認識とは言えないことになる。事実との顛倒事例二つを示す必要を感じたマルクスの操作の産物と言わねばならない。

第二に、ベイリーも匿名者も、「価値」について「二つの商品が相互に交換される比率」という相対的関係を示す概念と捉えている。その見地からリカードについて、ベイリーは「価値を労働の積極的成果 (value as the positive result of labour) として語る」と批判し、『考察』の著者は「価値を相対的なものの代わりに、何か絶対的なものに仕立てて仕舞った (has made of it something absolute, instead of relative)」と論難する。マルクスが、註記36を用意して、「『考察』の著者およびS・ベイリーは、リ

カードを、彼が交換価値をただ相対的なものから絶対的なものへ転化したと責めている」と述べているのは、このような事情を示すものである。マルクスは、続けて、「実際は逆である。彼は、これらの物、たとえばダイヤモンドおよび真珠が交換価値として持つ外観的相対性を、外観の背後に隠されている真の関係に、人間の労働の単なる表現としてのそれらの相対性に、還元したのである」と述べて、二経済学者への反批判を展開する。(1) 価値自体について交換可能性ないし購買力と理解し、(2) その交換可能性ないし購買力の根拠を成す価値実体として労働を想定し、(3) 交換可能性ないし購買力を眼に見える形で表現する価値形態 (= 交換価値) として価格を位置づける —— 三層構造の価値概念を用意するマルクスであってみれば、『考察』の著者およびS・ベイリーの見解は、(1) と (2) の関係について考察を欠くものとして、批判されざるを得ない存在なのであった。

商品を巡る物神崇拜論

「二経済学者からの引用」と『空騒ぎ』からの引用を振り返ってみる。マルクスは、「物神崇拜によって甚だしく欺かれている」経済学者として、『考察』の匿名著者とベイリーを挙げた。マルクスは、『資本論』の執筆過程で、無数の、と言ってよいほどに膨大な文献を渉猟した。そのなかで、匿名者の著作中に〈(Value is a property of things, riches of man.) 「価値は物の属性であり、富は人間の属性である」〉、ベイリーの著作中に〈(Riches are the attribute of man, value is the attribute of commodities.) 「富は人間の特性であり、価値は商品の特性である」〉、二つの酷似した文句を見出したとき、マルクスは、秘かに快哉を叫んだに違いない。この二人の文章の検討を通して物神崇拜 (Fetishismus) の様相を明らかにするために、まずは、生命無き商品を人格化して「ものを言う」商品を設定する。そして、「使用価値は物としてのわれわれに属するものではない。われわれに物的に属するのはわれわれの価値である」と、商品形態の真実 (使用価値は物象に属し、価値は物象に属するものではない) と、真逆の顛倒した姿を、語らせる。そのうえで、匿名者とベイリーの「富」を「使用価値」に置換して、彼らが「物象の使用価値はその物象的属性には関りが無いが、その価値は物象としてのそれに属していることを見出すのである」と、商品形態の真実とは真逆の顛倒した認識を持つに至ったと強調する。その真逆の顛倒性が、「容貌の善い男であることは自然の為す業であるが、読み書きができるということは境遇の賜物である」というべきところを、「容貌の善い男であることは境遇の賜だが、読み書きができるということは自然の為す業である」と転倒した表現に言い間違えたドッグベリーに酷似している、そのことを印象深く語るために、マルクスは、シェイクスピアの台詞を少しだけ変形して翻訳・引用したのである。対象物を主体化する、そのうえで真実と真逆の顛倒した認識を抱く、それが、裏面から伺える物神崇拜の状況だと言えよう。

それでは、正面から見たとき、物神崇拜はどのように説明されているのか、マルクスの叙述に従って辿ってみたい。第一章「商品」第四節「商品の物神的性格とその秘密」(Der Fetischcharakter der Ware und sein Geheimnis) は、その第一分節をこう始める。「一見したところでは、商品は、自明で平

凡なもののように見える。だが、分析して見ると、形而上学的な屁理屈と神学的な気まぐれに満ちた極めて厄介なものだとわかる」(S.85; 133頁)。

続いて、使用価値面からと価値面から見た神秘性が綴られる。「それが使用価値であるかぎりでは、それには何ら神秘的なものはない (nichts Mysteriöses)。…例えば、材木で机を作れば、材木の形は変えられる。それにもかかわらず、机はやはり材木であり、ありふれた感覚的なものである。だが、机が商品として登場するや否や、それは感覚的に言えば超感覚的なものに転化する。それは足で床に立つばかりでなく、他のすべての商品に対して頭で立ち、その木頭からは、机が自分勝手に踊りだすときよりもはるかに奇怪な妄想を繰り広げるのである」(S.85; 133頁)。足で立つと同時に頭でも立つという、通常感覚では捉え難い思いっきり理解困難な情景が描き出される。

第二分節に移ると、平明な叙述に変わる。「かくして商品の神秘的性格 (der mystische Charakter der Ware) は、商品の使用価値から生ずるのではない。それはまた、価値規定の内容から生ずるでもない」(S.85; 134頁)。商品の神秘的性格は、使用価値からも、価値規定の内容からも生じないと否定面が強調される。

第三分節において、神秘的性格の内容に、積極的説明が与えられる。「それでは、労働生産物が商品形態をとるや否や生ずる労働生産物の謎的性格 (der rätselhafte Charakter des Arbeitsprodukts) は、どこから生ずるか? 明らかにこの形態そのものからである。人間の労働の同等性は、労働生産物の同等な価値対象性という物象的形態を受け取る。人間的労働力の支出の時間的継続による度量は、労働生産物の価値量という形態を受け取る。最後に、生産者たちの労働の社会的規定が実現される彼らの諸関係は、労働生産物の社会的関係という形態を受け取る」(S.86; 135頁)¹²⁾。

第四分節では、以上の人間の労働の関係が労働生産物の関係として反映される現象が、一般化されて人間と人間の関係が物と物の関係として現象するに至ること、そういう顛倒した現象の類例は宗教的世界の夢幻境において見出されることが強調されて、物神崇拜の観念の規定が示されることになる。「商品形態の神秘性 (das Geheimnisvolle der Warenform) は、たんに次の点にある、— 商品形態は、人間自身の労働の社会的性格を、労働生産物そのものの対象的性格として、これらの物の社会的な自然属性として、人間の眼に映じさせ、したがってまた生産者たちの総労働に対する社会的関係を、彼らの外部に存在する諸対象の社会的関係として、人間の眼に映じさせること、これである。この置き換え (Quidproquo) によって、労働生産物は商品— 感覚的には超感覚的な物、また社会的な物

12) 第二分節で、商品の神秘的性格は価値規定の内容から生ずるのでもないとして述べつつ、第三分節で、労働生産物の謎的性格を成すものとして、価値の実体規定を成す労働に言及するのは、整合性を欠くようにも見える。第二分節で、価値規定の内容として挙げるのは、次の三点である。「第一に、有用的労働または生産的活動が如何に異なると、それらは人間的有機体の機能であるということ、および、こうした機能はいずれも、内容や形式がどうあろうと、本質的には人間の脳髄・神経・筋肉・感官などの支出だということは、生理学的な真理である。第二に、価値量の規定の根底にあるもの、すなわち前述の支出の継続時間、または労働の量について言えば、この量は感覚的にも労働の質とは区別されるものである」「最後に、人々が何らかの様式で相互のために労働し合うや否や、彼らの労働もまた、一つの社会的形態を受け取る」(S.85-6; 134頁)。この三点を点検すると、第三分節で述べられる三点の形態的特徴に照応していることがわかる。そのうえで、第二分節の三点は、いずれも人間労働そのものに関わる説明であるのに対して、第三分節の三点は、労働生産物という対象物の取る物象的形態に即した説明である。その点に注目して、第二分節の価値規定に関わる説明は、「神秘的性格」に関わらず、第三分節の労働生産物に関わる説明は、「謎的性格」に関わるものと考えられる。

—となる」。「視覚の場合には、外部的対象である一つの物から眼という他の物に、現実には光が投げられる。それは、物理的な物と物との間の物理的関係である。これに反して、労働生産物の商品形態およびこの形態が自己をそこで表示するところの労働生産物の価値関係は、労働生産物の物理的性質およびそれから生ずる物象的関連とは、絶対に何の関りもない。それは、人間そのものの特定の社会的関係に他ならぬものであって、この関係がここでは、人間の眼に諸物の関係という幻影的形態を取るのである」。「それゆえに、類例を見出すためには、われわれは宗教的世界の夢幻境に逃げ込まねばならない。ここでは、人間の頭脳の生産物が、独自の生命を与えられて、相互の間でも人間との間でも、関係を結び合う自立的姿態のように見える。商品世界では、人間の手の生産物がそう見える。これを私は、物神崇拜と名付ける (Dies nenne ich den Fetischismus)。それは、労働生産物が商品として生産されるや否や労働生産物に纏いつくもので、それゆえに、商品生産と不可分のものである」(S.86-7; 135～6頁)。

ここまで辿って来て、「物神崇拜」(Fetischismus)という言葉で、マルクスが如何なる事態を意味しているか、抽象的ながら理解できることになる。「人間の頭脳の産物である」神々が「独自の生命を与えられて、相互の間でも人間との間でも、関係を結び合う自立的姿態のように見える」(Hier scheinen die Produkte des menschlichen Kopfes mit eigenem Leben begabte, untereinander und mit den Menschen in Verhältnis stehende selbständige Gestalten.) のと同様に、「生産者たちの社会的関係が、外部に存在する諸対象の社会的関係として人間の眼に映る」事態、あるいは「人間そのものの特定の社会関係が、人間の眼に諸物の関係という幻影的形態を取る」(Es ist nur das bestimmte gesellschaftliche Verhältnis der Menschen selbst, welches hier für sie die phantamagorische Form eines Verhältnisses von Dingen annimmt.) 事態を指している。

第五分節以下で、そのような抽象的規定に加えて、具体的事例が提示されることを期待するのは当然のことである。しかしながら、期待は肩透かしに近いことになる。第五分節では、「商品世界のこうした物神的性格は、以上の分析で既に明らかにされたように、商品を生産する労働の独自の社会的性格から生ずる」(S.87; 136頁) というように、第三分節で「労働生産物の謎的性格」を生むとされた「商品形態そのもの」の究明ではなくて、第二分節で「商品の神秘的性格は」「価値規定の内容から生ずるのでもない」とされた「価値規定の内容」つまり価値実体としての労働の解明へと論陣が逸れて仕舞う。ただし「商品の神秘的性格」に関わる文言としてただ一つ第九分節の次の一文が極めて重要である。「労働生産物の価値性格は、事実上、価値量の運動を通じてはじめて確立される。この価値量は、交換者たちの意志や予知や行為には関りなく、絶えず変動する。交換者たち自身の社会的運動が彼らの眼には、物象——彼らによっては制御されないで、彼らを制御する物象——の運動という形態を取る」(In der Tat befestigt sich der Wertcharakter der Arbeitsprodukte erst durch ihre Betätigung als Wertgrößen. Die letzteren wechseln beständig, unabhängig vom Willen, Vorwissen und Tun der Austauschenden. Ihre eigne gesellschaftliche Bewegung besitzt für sie die Form einer Bewegung von Sachen, unter deren Kontrolle sie stehen, statt sie zu kontrollieren.) (S.89; 139頁)。

人間の労働の産物・諸商品の価値の大きさは絶えず変動を繰り返しているが、人間がその動きを制御できるわけではない。少し踏み込んで言えば、諸商品の価値の動向の累積したものが恐慌であり不況である。恐慌や不況は人間の活動が生み出したものでありながら、人間はそれを制御できず、翻弄されるばかりである。このような景気循環の例示を挙げれば、「生産者たちの社会的関係が、外部に存在する諸対象の社会的関係として人間の眼に映る」事態、あるいは「人間そのものの特定の社会関係が、人間の眼に諸物の関係という幻影的形態を取る」事態における顛倒性を指して、物神崇拜と言うことが出来ると考えられる。

第一一分節において、マルクスは「商品世界の一切の神秘、商品生産の基礎上で労働生産物を霧で包み込む一切の魔法や不思議は、われわれが他の生産形態に逃げ込めば、たちまち消えて仕舞うのである」(S.90; 141頁)と述べて、ロビンソン物語の世界(第一二分節)、ヨーロッパの中世世界(第一三分節)、農民家族の素朴な家父長制的勤労の場合(第一四分節)、共同の生産手段で労働し、自分たちの個人的労働力を意識的に社会的労働力として支出する自由な人々の結合体の場合(第一五分節)という順序で、非商品経済的關係を分析する。この部分は、興味深い叙述ではあるが、筆者の当面の課題ではないので、今は検討を措くことにする。

[九州大学名誉教授]